



「世のなか安穏なれ」について

北塔光昇（きたづか みつのり）

親鸞聖人七百五十回大遠忌のローガンが「世のなか安穏なれ」に決まりました。

このローガンは、昨年『宗報』十月号で募集され、多くの応募作の中から選ばれたものです。このローガンについて不二川公勝総長は、執務方針演説の中で、「ご消息にお示しを頂いている平和な世界を築くために貢献していこうとする私どもの姿勢を示すものであり、御同朋の社会をめざして取り組んでいる基幹運動の重点項目に示されている、いのちを損なう現代社会の諸問題や非戦平和、人権・環境などの課題に取り組む実践活動にもつながる」と述べられています。

ご消息のお示しとは、「親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息」の

如来の智慧によって、争いの原因が人間の自己中心性にあることに気付かされ、心豊かに生きることのできる世の中、平和な世界を築くために貢献したいと思います。というお言葉です。

周知のように「世のなか安穏なれ」というローガンは、『親鸞聖人御消息』、七月九日付、性信坊宛にある宗祖のお言葉によるものです。

往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候ふべし。わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏ころろにいれて申して、世のなか安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ
（『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』七八四頁）

「往生を不確かとお考えの人は、まずは自身の往生のことをお考えになってお念仏するのがよいでしょう。自身の往生はまちがいないとお考えの人は、如来のご恩をお思いになるにつけ、ご報謝のためとしてお念仏を心にいれて申し、世の中が安穏であるように、仏法が広まるようにとお思いなさるのがよいと思われます。」

このような意味のご文ですが、宗祖は、「世のなか」をどのようにとらえておられたのでしょうか。「世のなか」という言葉を『教行信証』に求めますと、信巻に『涅槃経』の次のご文を引用されています。

迦葉、世に三人あり、その病治しがたし。一つには謗大乘、二つには五逆罪、三つには一闍提なり。かくのごときの三病、世のなか極重なり（『同』二六六頁）

『涅槃経』では、過去世も現世も来世も、一切の世に対して「世の中」という言葉を使用しています。仏教では、「世」という語を「遷流（うつりかわること）」、「破壊（こわれること）」、「覆真（真実を覆うこと）」などと解釈することが多いので、『涅槃経』の「世」も、真実を明らかにできぬ、常に遷り変わる私の生きている世の中を指していることと思われます。

また、「安穩」という語は、『大經』の「讚仏偈」に

十方より来生 せんもの、心悅清淨しんえつしょうじょうにして、すでにわが国に到らば、快樂安穩けらくあんのんならん。（『同』一三頁）

と、悟りをひらいた浄土の人に対してのご使用です。また、宗祖が『教行信証』にご引用されている多くの経釈中の「安穩」の語も、如来の智慧と慈悲のはたらきによって衆生しゅじょうが安穩になるとされる箇所でのご使用です。

これらのことから、宗祖の記された「世のなか安穩なれ」とは、私の生きている世の中に如来のお慈悲が一層はたらくように、お念仏が広まるようにとの願いが込められていると窥えます。したがって、宗祖は、続けて「仏法ひろまれ」ともおっしゃったのでありましょう。

現代は、「世の中」という言葉よりも「社会」という言葉のほうが一般化しています。「社会」という語は、“society”の訳語とされます。『広辞苑』第五版には、「人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が一つの輪郭をもって現れる場合の、その集団。諸集団の総和から成る包括的複合体をもう」と定義されています。「社会」

は、個人と個人との集合体を意味する言葉なのです。本来すべてのものが一味平等いちみびょうどうであるものを、私が分別ぶんべつして、そこに生きているのだとする「世の中」とは異なった意味の言葉なのです。さらに言えば、「世の中」には、人間だけでなく衆生と呼ばれるように多くの生き物がいますが、「社会」には人間しかおりません。

以上のことを考えに入れながら、「世のなか安穩なれ」というスローガンの持つ意味を具体化してみますと、前掲ご消息のご門主のお言葉に尽きることであります。

（司教）